

Title	Preserved Smith: The age of the reformation
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.3 (1922. 5) ,p.127(477)- 128(478)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乘
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

讀書。而亦無卓行者。不作。

一婦人壽序、非高閱華封年七十以上及有節行者、不作。

一以壽文轉獻達官要人者、雖出至親密友之請、亦照例價。

一知好而極貧者、爲其先人求作碑志序記。或乞壽文榮其親者、不在此例。或餉佳籍、古琴、古硯、古墨、及佳卉、名石、佳

讓、均可。

一爲知好作志銘、任情所至、不在此例。

一代人作館閣進擬表賦、照壽序駢文例。雖知好不減價。其賀大禮。或官書告成奉進之表。如廟碑駢文例。知好減四十金。

(田中萃一郎)

Preserved Smith : The Age of the Reformation.

New York, 1920. 8vo. XII+862pp.

本書は『第十六世紀の文化史』である。著者の反對もくなく、人間の知る如く近世史上稀に見る重大な變革の一時期であつた。資本主義の勃興したのも、文藝復興の終末を告げたのも、宗教改革の初まつたのも、みな此の時期に於てあつた。がくも互に前後交錯して因果の關係にある是等の事項を巧に按排して一巻の中に包摶した著者の技倅は賞讃に値する。その前半は總論の外、月並的叙述の宗教改革史であつて、例により獨逸のルーテルに初まつて、諸國を経過した上、西班牙の反宗教改革に終つてゐる。たゞ

カルヴァンの眞價が適當の認識を得てゐないといふ米國のフェーエ教授の非難は尤であるが、之もウェルズの通俗世界史にすら記されてない位であるから、カルヴァンはもう時世後れであると見てよいのであるかも知れぬ。そば兎も角、西洋で印刷術の威力を發揮するに至つたのが當期であるから、この頃から宗教を關聯して出版檢閲の八釜しくなつたのも無理もない、隨つて異端禁壓手段の一として『禁書目錄』『改書目錄』の發表を見るに至つた沿革も又本書の中に記されてゐる。著者はそが影響を說いて、サーキ、ミルトンなどの盛んな反對はあつたけれども文學上には之が大害を及ぼしてゐない、西班牙文學の黃金時代は無免許書籍の印行者を死刑に處する法律が發布された後であつたし、英國の嚴法はシエークスピヤにその宗教上及び政治上の意見を吐露せしめなかつたかも知れないが、その文才を妨げたとは言へない。之は科學にも殆んど惡影響を及ぼさなかつた。たゞ民衆の政治的見解を狹め、獨創を妨げたと論する所、本邦の所謂新思想家の間から異論が起りそうである。

以上は本書の誇るべき部分ではない。人によつては讀まずともよい。併し本書の後半は何人も讀まずに居られまい。當代の社會、經濟、思想に關する所謂文化史的記述はこの部分に集注されてゐる。國勢調査に興味のある人は第十章を讀むがよい、そこには歐洲當時(1500年)の人口が、第二十世紀初頭に於けるそれの約四分の一であつた事が記されている。それに又一九一四年の世界は一五一四年に比し百二十八倍の富を有すると言ふが如くに呑み

込み易い數字が澤山掲げられてゐる。斯のやうな専門大家が素人今まで理解し得るやう意を用ひた處本邦の學者も眞似てよからうが記されてゐる。こは當期の經濟史研究者に好い参考となるであらう。諸制度や私的生活、風習の如きも詳細に記されてゐる。婦人問題や結婚問題の研究者は之を見落すことが出来ないであらう。資本主義的革命の一章は近代の社會問題の發端について教ゆる所が妙くない。救貧制度が宗派以外の手で早くから低地諸國に行はれてゐたことや、百姓一揆を見なかつた蘇聯の如き地で初めて農奴が解放せられ、一三六五年にはその殘影を止めぬやうになつたのに、英蘭ではエリザベス朝になつてもまだ解放を見なかつた點や、佛蘭西の農奴解放は屢々當人の意志に反して行はれ、彼等は自由をすてゝ再び農奴たらんことを望んで大舉して他國に移住したことなどは、當代の知識がなければ異様に思はれるこであらう。

次いで聖書古典の研究から修史、政治學說、科學、哲學等に至るまで思想的方面の大勢が窺はれ、又當代の特性を知るべき信仰自由問題から妖術、教育、藝術、書籍等に關する細説がある。ゴベルニクスに關する記述の如き注目すべきものであるが、就中余に取つて興味のあつたのは宗教改革其者に對する史觀の變遷を記せる最後の一章である。ロビンソン氏の名言の如く、『吾人は事實を取扱つてゐるつもりでも、實は常にその心理を取扱つてゐるのである。』 The Mind in The Making, by J. H. Robinson, 192) 人に

より其の境遇と時代によつて同一主題が色々に解釋されるのは蓋し當然であらう。之あればこそ、歴史の研究は何時までもその生命を失はないのである。第十六、七世紀に宗教的政治的解釋が下され、第十八世紀には合理主義、主想主義の見解がやがて一八五九年より始まつた經濟史觀、進化論的解釋に轉じて行くところ、近代人の好讀物たるを失はぬ。

余は學者にも初學者にも有益なる斯のやうな著述がすべての時代にあつてほしいと思ふ。

(問崎万里)